論文の内容の要旨

論文題目　セクシュアリティと都市的社会空間の編成
～新宿二丁目における「ゲイ・コミュニティ」意識形成の背景に関する分析から～

氏　名　　砂川　秀樹

本論文は、東京都新宿区にある新宿二丁目という街をフィールドとして、盛り場の一つにしか過ぎないその場所が、「ゲイ・タウン」として表象されるだけでなく、そこで築かれる関係性を「コミュニティ」と呼ぶ意識が、ゲイバーの店主や従業員、あるいはそこへ通う客たちの間で生起している様子を民族誌として描き、その背景にある条件性を分析するものである。

しかし、それを単に二丁目と日本のゲイに関する記述、分析に留めず、盛り場がいかに歴史的蓄積とマテリアリティ（物理性）などの場所性の中で編成されるのか、また、そこではいかなる社会的結合関係が形成されているかという大きな問いへ接続し考察している。　そして、二丁目における「ゲイ・コミュニティ」と呼ぶ意識の誕生を、そのような盛り場の編成や社会的結合関係の形成と、支配的な概念枠組みの中で生起してきたマイノリティの抵抗的実践の交差という動態的プロセスとしてとらえ、さらに、それらの考察から、セクシュアリティと社会的結合、およびセクシュアリティと「コミュニティ」意識の形成との関係について論じ、セクシュアリティの定義や、「『コミュニティ』とは」という問いへの回答を図った。

本論文は、1997 年から８年間にわたるフィールドワークなどをもとにしており、二丁目におけるゲイバーのネットワークや、そのネットワークを中心に 2000 年から二丁目で開催されている「東京レインボー祭り」を主な考察の対象としているが、序章では、先の目的と合わせ、この調査方法や調査対象と、それに関わる定義を提示した。また、この章において、人類学におけるホモセクシュアリティ研究やゲイ／レズビアン研究、そして日本のゲイを対象とした研

究のレビューもおこなっている。

第１章では、「東京レインボー祭り」について、2000 年に初めて開催されるに至る経緯も含めて記述し、その祭りが二丁目を訪れるゲイにとってどのような意味を持っているのか、人類学における祭りの定義などを参考にしながら分析した。そして、二丁目における関係性を「コミュニティ」と表現する心性が生じていることを指摘した上で、そのような語りと相互に影響しあっていると思われる変化を、ゲイの空間や時間の拡大という観点からとらえている。また、祭りをきっかけに結成された「新宿２丁目振興会」を、二丁目のネットワークの組織化として位置づけた。

第２章では、新宿という街がいかに編成されてきたか、歴史的背景やその中で蓄積されてきた場所性、あるいはマテリアリティの変化という面に注目して考察した。宿場町として開設された新宿は、当初から「性」によって動かされてきた街であった。そのため周縁的なイメージが付与され、戦後にいたるまで「アジール」的な場所として機能し、そのよう場所性によりゲイが集まりやすい空間を形成された。また、二丁目が売春防止法以降に空洞化したことが、その街にゲイバーが集中していった理由として語られることは珍しくないが、そのようなプル要因だけではなく、新宿駅を中心とする「非性的エリア」の拡大や都市計画による開発というプッシュ要因があった可能性も指摘した。さらに、二丁目が大きな道路などの＜エッジ＞によって取り囲まれることによって、街としての独立性を感じさせるつくりになっていることも、その場所に「コミュニティ」イメージを投影しやすい条件の一つとなっているという考察を提示している。

続いて、二丁目の具体的な様子を示しながら盛り場の社会的結合の構造を分析したのが、第３章である。この章では、盛り場のアクターを土地や建築物の所有のあるなし、その街への居住のあるなしという軸で分類し、多層的な盛り場アクターが権利や空間の共有という点で重なることによって社会的結合関係を形成していると分析した。また、所有や居住という点では、他の盛り場のアクターとは社会的結合を形成しない利用者が、バーのように長時間滞在しコミュニケーションの多い小規模な店に「なじみ」となることで、盛り場に接合されることを指摘し、先の権利や空間の共有と、この「なじみ」によって、バーなどの店が盛り場のあらゆるアクターと結びつくことを指摘している。そのような意味では、ゲイバーはバーの中で特異な存在ではない。しかし、ゲイバーには異性愛者を主な対象とするバーとは異なる役割を果たしており、そのようなゲイバーの特徴について詳述したのが第４章である。

ゲイバーには、「観光バー」と呼ばれる店がある。それは、異性愛者を主な客とする店であるが、その定義には大きな揺れが存在している。その揺れも含め、「観光バー」とそれ以外のバー（ゲイメンズバー）の違いとして語られる点に注目しながら、ゲイメンズバーの持つ性質について考察した（ちなみに、「ゲイメンズバー」とは、この論文で、ゲイだけを対象とするバーに便宜的につけた名である）。この章では、ゲイメンズバーが、同じ「文化」を共有していることを体感、確認する空間であり、それを通してその「文化」を構築・再生産している空間となっ

ていることを民族誌的に描いている。また、ゲイメンズバーにおける社会的結合のあり方がコミュニティ意識を形成の土台となっていることを指摘した。

そして、第５章では、新宿二丁目に「ゲイ・コミュニティ」という言葉が投影される背景としてある、ゲイが置かれてきた社会的状況の変化を追った。1971 年に登場したゲイ向け商業誌によって、ゲイが経験や情報を共有することで共同性を発見していったこと、ゲイ・アクティビズムなどの影響で、「ホモ」という言葉がより肯定的なイメージのある「ゲイ」という言葉へと変わっていったこと、1980 年代の後半から 1990 年代にかけて、対面的関係を持てる場が増大していったことなどを大きな変化として挙げた。また、HIV/AIDS の登場によって、社会の中でゲイが可視化していく流れについても触れた。

続く第６章では、ゲイメンズバーの考察を土台にして、人と人とが親密な関係を結ぶ形を根源的なところに立ち返り整理し、セクシュアリティについて考察した。そのように整理される親密な関係性は、＜直引関係＞と＜介在関係＞の二つである。＜直引関係＞とは、直接相手に惹かれる関係のあり方であり、＜介在関係＞とは第三項を共有することにより結びつくあり方である。ここで言う＜介在関係＞という概念と、ルネ・ジラールの「三角形的欲望」やイヴ・Ｋ・セジウィックの「ホモソーシャル連続体」という概念との違いを明らかにしながら、異性愛における＜介在関係＞とゲイにおける＜介在関係＞の構造の違いについて論じた。その上で、セクシュアリティに関する筆者の新しい定義を提示している。またこの章では、ゲイメンズバーが、パートナーシップを見つけられる可能性のある空間として、あるいはパートナーシップが承認される場所として機能することが、「コミュニティ」観と結びついていることを指摘した。

そして、最終章では、これまでの論を「社会空間」「抵抗的実践」「コモンズ」という概念で整理し直したうえで、「コミュニティ」とは常に＜コミュニティ化（communitization）＞という動態であるという視点を提示している。